

山梨県内の小学校英語教育における 指導者の養成と研修に関する研究

2012 年度山梨県立大学地域研究交流センター

共同研究 研究成果報告書

研究テーマ

山梨県内の小学校英語教育における
指導者の養成と研修に関する研究

研究代表者 高野美千代（国際政策学部・准教授）

共同研究者 伊藤ゆかり（国際政策学部・准教授）

高見澤 肇（甲府市立新紺屋小学校・校長）

石田 一元（甲府市立石田小学校・教頭）

池田 充裕（人間福祉学部・准教授）

平成 25 年 3 月

目次

はじめに	3
第 1 章 研究の目的	4
1-1. 事業計画	4
1-2. 研究年度計画	6
1-3. 計画の見直しまで	7
1-4. 具体的仮説とねらい	9
第 2 章 研究の方法	11
2-1. 講座計画	11
2-1-1. 広報・講座参加への呼びかけ	11
2-1-2. 講座参加希望者	11
2-1-3. 講座運営準備	12
2-2. 講座内容	13
2-2-1. タイムテーブル	13
2-2-2. 第 1 講座	13
2-2-3. 第 2 講座	22
2-2-4. 第 3 講座	25
第 3 章 研究結果	30
3-1. 講師からの寄稿 A Report on TEYL Seminar Jan/Feb 2013	30
3-2. 受講者からの声	33
3-2-1. プログラムに参加したきっかけ／理由	33
3-2-2. 本プログラムで得られた有益な情報など	34
3-2-3. 意見・要望	36
3-2-4. トレーニングプログラム感想	38
3-2-5. 受講者からの声への対応として	40
第 4 章 考察・意見	41
English for Elementary School Teachers	42
Tips and Theories for Teaching English for Japanese Teachers	45
小学校英語教育指導者トレーニングプログラムを考える	48
Should English be Taught in Elementary School?	51
小学校「外国語活動」の導入と小中連携への展開	54
The Importance of Intrinsic Motivation in Japanese Elementary School English Programs	55
まとめ	58
仮説検証	58
プログラムの反省と今後の可能性	60

はじめに

外国語活動現状と問題点、課題

平成 23 年度より小学校の新学習指導要領に「外国語活動」が加わり、5・6 年生で年間 35 時間が必修となった。当然のことながら、外国語教育を指導対象としてこなかった小学校教諭にとって、これは大きな負担であろう。このような現状を踏まえて、同じ地域の教育現場への支援の意味を込め、さらにはこれから教員を目指す本学学部生の学びの機会を提供するため、山梨県教育委員会・甲府教育委員会の後援をいただき、平成 25 年 1 月～2 月にかけて「小学校英語指導者トレーニングプログラム」を開講することとした。この講座によって県立大学英語教員もチームで研修に取り組み、将来的には山梨県立大学において教員免許更新講習選択科目「外国語活動」を提供するための準備として役立てることを目標に掲げた。

実際には 23 年度よりも前から、小学校では英語の授業が「総合学習」の時間に取り入れられるなどしてきた。遊びを中心とした英語の断片的なやり取りを行うことでどれほどの成果が上がるのか疑問視する声も実際には多くあったことは事実だ。早期英語教育の良し悪しを継続して議論するのは重要であるが、必修となってしまった今、我々ができる地域へのサービスとしてまず第一歩を踏み出すこととした。

地域に貢献する意味合いを持つ研究プロジェクトであるため、山梨県立大学地域研究交流センターの地域研究課題として研究費の助成を申請することとした。申請の際には事前準備として、甲府市内の小学校教諭から協力を得てプログラムの内容と日時を検討し、計画に反映させた。また、地域の小学校教諭が英語教育に対して持つ意見・疑問等についても間接的に聴取し、立案の際には検討を行った。とはいえ、教育学部を持たない県立大学で、英語教育を本来の専門分野としない教員が一から始めた計画である。しかも小学校英語教育の状況は年々変化しており、私たちが教育内容・方針や実状のすべてを正確に把握していたとはもちろん言えない。しかしながら、今年度はとにかく初めての試みとして、自分たちの勉強の機会と位置付けてプロジェクトに取り組み、来年度以降も継続できる場合にはプログラム内容を含めて着実に改善していくように努めるべくスタートを切った。

本報告書には「小学校英語指導者トレーニングプログラム」計画から実施についての詳細、そして課題と考察をまとめた。

研究代表者 高野 美千代

第 1 章 研究の目的

1-1. 事業計画

山梨県立大学としての特色のあるプログラムを構築し提供することを念頭に、下記の計画をもって地域研究交流センター・共同研究に申請を行った。

1. 研究テーマ

「山梨県内の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究」

2. 研究者

①代表者

高野 美千代 (国際政策学部・准教授)

②共同研究者

高見澤 肇 (甲府市立新紺屋小学校・校長)

石田 一元 (甲府市立石田小学校・教頭)

池田 充裕 (人間福祉学部・准教授)

伊藤ゆかり (国際政策学部・准教授)

3. 研究の背景と目的

平成 23 年度よりすべての小学校では「外国語活動」が必修化され、そのカリキュラムの作成と運営は各学校において必須となっている。「外国語活動」は、児童の英語コミュニケーション能力の素地を育成することを目指しており、これに対する期待と注目度は大きい。文部科学省だけでなく児童の保護者や地域からも様々な要望が寄せられているが、その一方で、ほとんどの指導者は英語教育や英語科教授法研究の経験を持たない。学級担任の主導で「外国語活動」を運営しなければならないため、現場では多くの教諭が非常に大きな戸惑いや負担を感じている。また、「外国語活動」の研究拠点校とそうでない学校とでは教員研修の機会の格差もあり、より充実した「外国語活動」を広く実現するためには解決すべき課題が多く存在している。

この研究プロジェクトでは、現状を踏まえて、山梨県内の小学校における「外国語活動」の運営をサポートする研修プログラムを研究・構築し、小学校教諭のためのセミナーおよびワークショップを開催する。この研修プログラムによって、受講者となる小学校の先生方には英語教育に関する基本的な理論を理解した上で ALT や補助指導員とのティームティーチングや個人で行う教授方法を修得してもらい、その成果が現場での教育に十分に還元されることをこの研究の最終目標に掲げる。と同時に、この研究を遂行することによって、教育学系学部を持たない山梨県立大学が、今後継続して地域の英語教育の発展に貢献する最良の形をぜひとも見極めたい。

4. 研究の方法と手順

①山梨県内小学校教師と本学専任教員との共同研究の形態をとる。共同研究者の高見澤氏は平成 23 年度甲府市校長会研究部会長として「外国語活動」の研究を実施、石田氏は長年にわたり「外国語活動」研究拠点校での教育に携わるなど豊富な経験と知識を有する。これら 2 名の共同研究者から協力を得ながら、現在の山梨県内の小学校「外国語活動」の状況、問題点、担当者の疑問・不安などを調査分析し、課題を解決する内容の研修プログラムを構築する。

②英国でも屈指の英語教育機関であるヨーク大学教育学部の英語教育センター（Centre for English Language Teaching、以下 CELT と略）から「外国語としての英語教授法（TESOL）」および「英語教師養成（Teacher Training）」の専門家を招き、英語教育におけるメソドロジーの基礎的な部分を扱いながら教員のスキル養成を行い、同時に意識改革と意欲向上をはかる実践的集中講座を開催する。これは、ヨーク大学と長年にわたり学生の言語文化研修を通じて交流し、友好関係を築いてきた本学ならではの特色あるプログラムとなり、国内で行われている通常の教員研修プログラムとは一線を画すものとなる。CELT 主任教員の Matt Smelt-Webb 氏には本研究の協力を依頼し、この計画について意見交換を開始しており、本学への講師派遣についても内諾を得ている。

③具体案としては、研修の定員を 20 名×2 グループの計 40 名とし、それぞれ週末を利用した 2 日間（計 4 日間）の集中講座を開催する。90 分を 1 コマとして、全 8 コマのうち 2 コマを理論（講演／セミナー）、6 コマを実践（ワークショップ）とする。講演では「外国語としての英語教育」、「児童英語教育」の各種理論・方法論を学ぶ機会とし、ワークショップではデモンストレーションを交えて実践を主に扱う。具体的な一案として、つぎのようなプログラム構成が考えられる。

指導者養成研修案（例）

	第 1 講座（90 分）	第 2 講座（90 分）	第 3 講座（90 分）	第 4 講座（90 分）
1 日目	イントロダクションと TESOL 方法論①（児童 の英語習得の原則）＊	ワークショップ （指導者のためのス ピーキングスキル）	ワークショップ （クラスルームイ ングリッシュ）	ワークショップ （発音の改善） フィードバック
2 日目	1 日目のレビューと TESOL 方法論②（言語 と文化の教え方）	ワークショップ（語彙 と文法の習得につい て）	ワークショップ （ティームティー チングのポイント）	ワークショップ（ゲー ムの有効な使い方）ま とめ、アンケートなど

*講演の際は必要に応じてコーディネーター役の高野が通訳を行うものとする。なお、ワークショップにおいても受け入れ側より複数名が立ち会って講座の円滑な運営をはかる。

受講者は、現役教諭を主な対象として山梨県内から広く募集することとし、定員の充足状況によっては児童英語教師（および志望者）や本学学生を含む小学校教諭志望者も参加可能としたい。

④2013年1月～2月の研修実施を念頭にしているが、終了後には受講者および講師からのフィードバックを受け、プログラムの改善に速やかに取り組む。地域に開かれた大学として、山梨県内の学校との連携を確立し維持することが望まれるところであるゆえ、将来的にも継続して県内の教員を対象とした質の高い研修を開催するための検討を十分に行う。

5. 研究の地域貢献

本プロジェクトにおける集中講座が計画通り実現できれば、「外国語活動」の運営に不安を覚える多くの小学校教諭をサポートすることになり、地域の中で問題解決の糸口を提供できることになると確信している。県立大学ならではのノウハウを駆使し、英国大学の専門家の協力を得て、地域の小学校教員との連携を図りながら最善のプログラムを構築することによって、山梨県内の小学校で「外国語活動」を担当する先生方に「英語教育に必要とされるもの」「教育理論と実践」「教育現場でのスキル」等について、地元山梨にいながらにして、その分野の専門家から学び、より効果的な「外国語活動」実践の基礎づくりを行ってもらうことが可能となる。

私自身、山梨県内の小学校における「外国語活動」のための教員研修に講師として招かれ、現場において懸案事項が山積している実態を目の当たりにしている。小学校の「外国語活動」に寄せられる期待・関心は大変大きいのだが、他の自治体に比べて山梨県はその充実に向けた対応が先行しているとは決して言えない。この状況を改善することに山梨県立大学が寄与すれば、間違いなく地域への重要な貢献を行うことができるだろう。

6. 研究経費

予算科目	金額	主な使途と金額
合計	910 千円	(詳細は省略)

以上

1-2. 研究年度計画

さらに次のような年度計画を合わせて提案した。

研究の目的

この研究においては山梨県内の小学校における「外国語活動」（英語教育）の運営をサポートする研修プログラムを研究・構築し、小学校教諭のためのセミナーおよ

びワークショップを開催する。現在、必修となっている「外国語活動」は担任主導で行われているが、英語教育の経験がない小学校教諭が担当するケースが多く、現場の混乱や教師の困惑は看過できない問題である。その問題を解決するために、この研修プログラムでは受講者となる小学校の先生方に英語教育の基本的な理論を理解した上で具体的な教授方法を実践によって修得してもらい、その成果が地域の教育現場に十分に還元されることを目的とする。と同時に、この研究を遂行することによって、教育学系学部を持たない山梨県立大学が、今後継続して地域の英語教育の発展に貢献する最良の形を見極めたい。

今年度における研究手法についての計画及び到達目標

研究は次のような手順で進める。①**準備調整（～2012 年 12 月）**：山梨県内の「外国語活動」に特に精通する小学校教師と本学専任教員との共同研究の形態をとり、現在の山梨県内の小学校「外国語活動」の状況、問題点、担当者の疑問・不安などを調査・分析し、それを踏まえて課題を解決する内容の研修プログラムを構築する。②**研修プログラム開講（2013 年 1 月～2 月）**：講師として県立大学と長年にわたり教育研究の交流を行っている英国ヨーク大学英語教育センターから、「外国語としての英語教授法（TESOL）」および「英語教師研究（Teacher Training）」の専門家を招聘する。ヨーク大学スタッフは日本人英語教師の養成・研修に関しても十分な経験と知識を持つため、受講者に最適なレベルと内容のセミナーが保証される。③**反省と改善の取り組み（講座終了後～年度末）**：受講者が理論を学びそれを実践によって身につけ、その成果が日々の「外国語活動」の取り組みに反映されることをこの研究の目標とする。また、講座終了後は速やかに全体の反省を行い、さらに充実した研修プログラムを地域の中で提供できるように細部の検討を進める。

来年度以降の計画

2012 年度の研究計画が採択され、「外国語活動」指導者研修が実現した場合には、将来的にも継続して同様の講座が年に一度のペースで提供できるようにプログラムの見直しを行い、さらなる充実を図りたい。

1-3. 計画の見直しまで

上記申請の審査結果（24 年 7 月 5 日付）は、つぎの通りであった。

1. 決定内容

平成 24 年度地域研究交流センターの共同研究として採択する。

2. 研究名称

山梨県内の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究

3. 交付額

35 万円を上限として必要と認める額

4. その他

- ・ 講師を外国から招聘する必要性及び報償費の支払いの必要性について検討し、予算の範囲内で実施するか、別途教育委員会又は受講者から費用を徴収する等の措置を検討してください。
- ・ 研修プログラムを実施するにあたっての目標と実施したことによる効果について報告書で言及してください。

計画の見直し・準備

審査結果の中で指摘があった以下の 2 点について検討を行った。

①講師を外国から招聘する必要性及び報償費の支払いの必要性について

これについては申請書において説明したとおり、本学ならではの講座を開講するために長年交流があり、TEYL (Teaching English to Young Learners) 領域で世界的にも最先端の研究機関である英国ヨーク大学と連携してプログラムを検討し、講師を派遣してもらうことが不可欠であると判断した。また、学術的水準を上げるために報償費を支払うのは当然のことである。県立大学教員の研究プロジェクトであるからには、私たち教員もヨーク大学から派遣される講師から最新のメソドロジーを学び、活発な意見交換を行うことで研さんの機会を確保することが本研究における主要な目的の一つでもある。

②予算の範囲内で実施するか、別途教育委員会又は受講者から費用を徴収する等の措置を検討せよ

教育委員会から費用を徴収するという発想は、今回の研究の趣旨に合うものと考えにくい。一方で、受講者から費用を徴収する措置の是非については検討を行ったが、今回は初めて行うプロジェクトでもあるため、試験的に無料の講座を提供することが最善であると判断した。

予算が当初の半分以下になってしまったため、極力その範囲内で収まるようなプランを検討する必要が生じた。第一には講座の期間を短縮し、当初 2 週にわたって行う計画であったものを 1 週の実施とすることとした。すべての経費を最小限に抑えたうえで不足分は教員の個人研究費から支出するという形を取ることにした。

1-4. 具体的仮説とねらい

本研究を進めるにあたって事前調査を行い、以下のような仮説を立てた。

①小学校「外国語活動」を充実させるための教員トレーニング講座の提供が地域の中で望まれている。

小学校における英語教育の取り組みが始まって数年になるが、小学校教員の中で英語教育を専攻していたり、英語教育の訓練を受けていたりする割合は少ない。しかし英語を教える教員としてのトレーニングを受講したいという希望があっても、日頃の業務だけでも多忙なスケジュールであるため、講座を受講したくても時間（あるいは機会）がないというケースが多い。したがって、地域の中で短期間の無料講座を提供することには多くの需要があるはずである。

②県立大学の個性を生かして、地域で既に行われている研修とは異なる講座内容を構築することができる。

既に各小学校ではたとえば夏季休暇中などに集中的な講座を開き、ゲームやチャレンツの実践練習を行うなど、英語教育関連の研修の機会を設けている。本学ではそのような研修の内容を把握した上で、本学ならではのノウハウを生かしたプログラムを構築し、受講者には新たな学びを提供し、それと同時に私たち自身も研鑽の機会を得たいと考えている。そのためには、日本国内で一般に行われている研修とは違う特殊性、専門性を取り入れたい。具体的には英国ヨーク大学教育学部 TEYL 領域の専門的見解をふまえたアプローチを導入する。これは本学とヨーク大学の長年にわたる交流の実績から実現できるもので、新たな学術的交流としても非常に価値のあるものと考えられる。

③多くの小学校教諭は、回数が十分だとは言えないが定期的に実践的研修を受ける機会を持つため、理論部分の導入も効果的である。

すぐさま授業で役に立つ実践的な内容を扱うことは非常に有用である。しかし基本的な理論を理解した上で実践に結びつけるほうが、確実に理解は深まり学習の効果も上がる。したがって理論部分にもしっかりと向き合う講座内容を検討する。

④内容のバランスとしては理論と実践的指導法のいずれにも偏らない講座が最適である。

③で述べたように、理論と実践は組み合わせて行うことで相乗効果が発生するため、とくに実践部分に重点を置くことはしない。実践部分すなわちゲーム・チャレンツを主に扱う講座は、確かに受講者にとっても楽しくすぐに役立つものである。しかし、教師としてそのアクティビティの背後にある狙い・効果を理解することが不可欠であると考ええる。

⑤小学校の現場の実情をふまえた講座内容の計画が必要である。

小学校における外国語活動の実際を理解してもらえるように、関連する資料をヨーク大学にも送付し、授業内容やレベルを把握した上でプログラムを構成してもらうよう依頼する。

⑥受講した現場の教員には、TEYL の在り方と、その実践方法を学ぶ有意義な機会となる。

「外国語活動」に限らず TEYL（児童英語教育）の基礎的知識を得て、さらに外国語活動の時間にも役立つ実践方法を学ぶことで受講者にとって有用なプログラムとなる。

⑦参加対象を現任教諭に限定せず、教諭志望者に枠を広げることによって、志望者にとっては小学校外国語活動についてだけではなく小学校教諭という仕事・教育現場の様子を学ぶ貴重な機会を提供することができる。

本学では平成 24 年度から小学校教諭教職課程を設置している。将来小学校教諭を志望する学生にとってもこの講座は大いに役に立つものとなる。また、英語専攻の学生の中には英語科教職課程履修者や児童英語教師志望者もあり、そのような学生にとっても非常に良い勉強の機会である。

⑧大学の地域への貢献とともに、大学と地域の学校教育現場の協同プロジェクトとして成果を上げることができる。

本研究課題を立案する際には地域の小学校教諭より意見を聞き、講座の計画にそれを反映させる。今回の研究によって、大学として地域の学校との連携の一つの形が模索できる。

以上の仮定に基づいて、本研究の中心となる「外国語活動指導者トレーニングプログラム」の計画を進めた。

第2章 研究の方法

2-1. 講座計画

本プロジェクト「山梨県内の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究」を進めるにあたり、まずは当初の計画を縮小する形で、削減された研究費に見合う内容の講座を計画した。内容は次の通りである。なお、小学校教諭などを対象とする講座の前後に県立大学英語科目担当教員を対象とするセッションを設け、講座の全体像の説明および総括の時間を確保した。

日 時

グループ A（定員 20 名）：2013 年 2 月 2 日（土）午前 10 時から午後 3 時 30 分／4 時

グループ B（定員 20 名）：2013 年 2 月 3 日（日）午前 10 時から午後 3 時 30 分／4 時

場 所 山梨県立大学飯田キャンパス（甲府市飯田 5-11-1） A 館 6 階サテライト教室
参加費 無料

タイムテーブル

時間	午前 10:00～11:30	11:45～午後 1:15	午後 2:00～3:30	～4:00
内容	Introduction and Storytelling	Games and Activities Workshop	Introduction to Talk for Writing	Q & A

その他 平日の講座を希望される方のために、上記内容を短くまとめた 2 日間の講座も用意。定員は 20 名で、両日出席できる方を優先して受け付ける。

平日グループ：2013 年 1 月 31 日（木）および 2 月 4 日（月）午後 5 時 30 分～7 時 00 分

2-1-1. 広報・講座参加への呼びかけ

上記の予定を広く周知するため、山梨県教育委員会及び甲府市教育委員会の後援を申請、1 月の甲府市小中学校校長会にて呼びかけ、県内各教育事務所宛に地域内小学校への文書の配布依頼、山梨県立大学ホームページにて案内の掲載、さらには個人的に案内の送付などを行った。

募集は 1 月 21 日を第一期締め切り、26 日を第二期締め切りとして行った。結果的には申込者数は芳しくない数字であった。したがって、各グループが平均的なサイズとなるよう若干の調整を行った。

2-1-2. 講座参加希望者

最終的に受け付けた各クラスの受講人数および内訳はつぎの通りである。

講座受講者

	1 月 31 日 (木)	2 月 2 日 (土)		2 月 3 日 (日)	
	PM	AM	PM	AM	PM
県内小学校教諭	6	8	8	2	2
その他	2	1	1	7	7
計	8	9	9	9	9

調整を行ったため、各クラスの人数は平均化された。その一方で、現役小学校教諭の出席者が少なく、それ以外の英語教師（および志望者）の参加が比較的多くあった。

2-1-3. 講座運営準備

24 年 9 月、英国ヨーク大学を高野が訪問し、CELТ（教育学部付属の英語教育センター）センター長の Dr. Paul Roberts 氏、CELТ 教員 Matt Smelt-Webb 氏に面会して今回のプロジェクトの協力を求め、プログラムの内容を具体的に検討する機会を得た。帰国後、継続してメールにて連絡を取り、詳細を相互に確認しているうちに、CELТ より派遣される講師が決定した。その後は講師との直接のやり取りとなった。講師は複数回にわたり CELТ 教員 Sally Jenkins 氏より助言を得てプログラムの内容を議論し、こちら側はその内容をさらに教員間で検討した。ヨーク大学から当初示唆されたトピックの例は

- Project work
- Story telling
- Talk for writing
- Games and activities
- Adapting course books

の 5 つであった。国際政策学部英語科目担当教員間で協議の結果、その中から小学校英語に最もふさわしいと思われる Storytelling, Talk for Writing, Games and Activities の 3 つを選択した。ただし、Talk for Writing については、レベル的に日本の小学校にそぐわないものと判断されたのであるが、これは英国の小学校において現在推奨されている最新の教育方法であり、この機会に内容を教授されたいという思いから選択するに至ったことを言い添えておく。Talk for Writing は CELТ における外国人 EFL 教員の研修ですでに導入しているトピックであり、しかも評価が高いものである。したがって、本学でも紹介してもらう貴重なチャンスであると判断された。また、今回の講座にあたっては TEYL 分野の著名な研究者であるヨーク大学の Annie Hughes 博士からもプログラム充実のための助言、資料提供をいただいた。

2-2. 講座内容

2-2-1. タイムテーブル

グループ A、グループ B 共通のタイムテーブルを用意した。

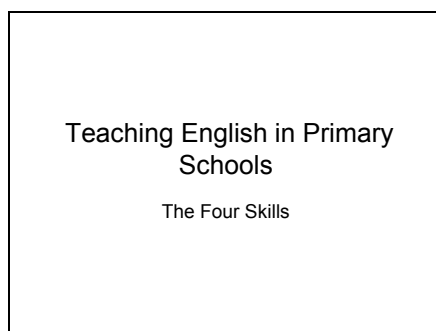
講座	時間	タイトル
1	10:00-11:30	Introduction to TEYL & Storytelling
2	11:45-13:15	Games and Activities Workshop
3	14:00-15:30	Introduction to Talk for Writing
4	15:30-16:00	Q & A

各講座の具体的内容はつぎの通りである。

2-2-2. 第 1 講座

この授業は 2 部構成となり、まず TEYL（児童英語教育）の基本が説明され、後半部では Storytelling の紹介・実践が取り上げられた。以下にスライドと説明を掲載する。

スライド 1



小学校英語教育
英語の 4 技能について

スライド 2

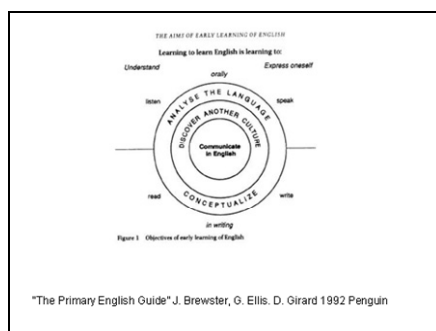
Some Facts

- English most prominent means of global communication
- 300million ESL speakers
- Official language for EU, UN, International Olympic, Aerial and Maritime comm.
- 85% international organizations use English as working language

英語の現状

- 英語は世界語である
- 英語は 3 億人の第 2 言語
- 世界的な機関の公用語は英語
- 85%の国際機関が英語を使用

スライド 3



英語習得の目的

スライド 4

TEYL

- Listening
- Speaking
- Reading
- Writing

英語の 4 技能

- リスニング
- スピーキング
- リーディング
- ライティング

スライド 5

Listening

"Good listeners often speak more exactly and more creatively than poor listeners: they have more words at their command."

James A. Smith (1975)

リスニング

「聞き上手は話し上手。
自由に使える言葉が豊か。」

スライド 6

Listening

- Ideal physical conditions
- Speak in animated and interesting manner at a speed they can follow
- Encourage anticipation
- Encourage group or whole class answers
- Replay activity for pupils to check themselves
- Give praise!

リスニングのポイント

- ・ 聴き取りやすい環境を
- ・ 意欲を持たせること
- ・ グループ活動をさせる

スライド 7

Speaking

- Songs, chants, and poems
(learning through rhythm and rhyme is more easily learned than through prose)
- Games and pairwork activities
- Oral report and discussions
- Offer praise - regardless of accuracy!

スピーキングのポイント

- ・ 歌、チャンツ、詩
(リズム・韻文で覚えるのは効果的)
- ・ ゲーム、ペアワーク
- ・ 口頭発表、ディスカッション
- ・ 正確さよりも発言をほめる

スライド 8

Reading

- Meet language proficiency and interest
- Stimulate interest beforehand
- Elicit and input key vocabulary
- Skimming and Scanning
- Encourage guesswork from context and illustrations
- Passive reading for comprehension
- Reading aloud for pronunciation (plays, poems etc)
- Fall in love with books!

リーディングのポイント

- レベルと興味に合わせて
- 前もって興味を持たせる
- 重要語句を絞って与える
- スキミング・スキヤニング
- 文脈とイラストから意味を予測
- 黙読、音読
- 本を好きにさせる

スライド 9

Writing

- Introduce alphabet (games, puzzles etc)
- Simple words and phrases
- Short paragraphs about themselves or something familiar (family, hobbies etc)
- End of unit exercises after maximum exposure to structures and vocabulary
- Sensitivity when correcting
- Encourage correction of their own work
- Decorate and display!

ライティングのポイント

- アルファベットを学ぶ
- 簡単な語句
- 身近なトピックで短い段落
- 構造や語彙を覚えて復習
- 間違いの訂正は注意深く
- 自分で訂正させる
- 飾るのもよし

スライド 10

Conclusion

- New and highly dynamic field
- Necessary to be open to new ideas
- Four skills to be taught separately
- Good luck and enjoy!

まとめ

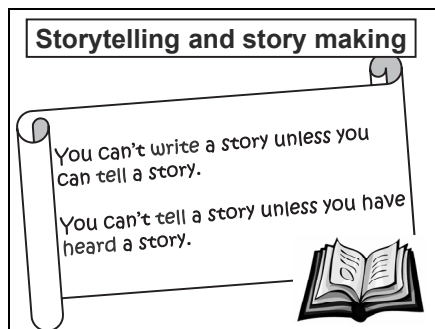
- 児童英語教育は新しくダイナミック
- 新たな考えを取り入れよう
- 4 技能は別々に教えられる

スライド 1

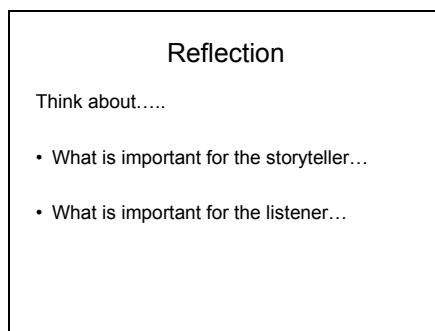


ストーリーテリング

スライド 2



スライド 3



考察

語り手にとって、聞き手にとって
何が重要なのかを考える

スライド 4

Techniques

- Begin with short sessions
- Young children sit on floor around you
- Read slowly and clearly
- Point to illustrations
- Invite participation
- Use gestures, mime and facial expressions to help with meaning

具体的テクニック

- 短時間で行う
- ゆっくりはっきりと読み聞かせる
- イラストを示す
- ジェスチャーを使う

スライド 5

Techniques (cont)

- Vary speed, tone and volume of voice
- Pause for dramatic effect
- Disguise your voice for different characters
- Make sound effects where possible
- Ask questions to involve children
- Repeat, expand, reformulate
- Repetition is good!

- 声の調子を変えてみる
- 音の効果を取り入れる
- 繰り返し、言い換えを行う

スライド 6

Pre-storytelling Activities

- Capture their attention — use realia and pictures
- Link with their past experiences- brainstorm
- Pre-teach new vocabulary
- Ask children to predict what might happen
- Give students a purpose for listening (as well as for pure enjoyment!)

準備として

- 注意を引いておく
- 語彙を教えておく
- ストーリー展開を予想させる

スライド 7

During storytelling

- Questions and answers
- Group retelling
- Create your own ending – then finish the story

途中でできること

- 質問等のやり取りをする
- グループで改作させる
- 話のエンディングを考えさせる

スライド 8

Post - storytelling activities

- Drama – act out the story
- Story boarding (like a comic) and story mapping
- Project work – create a wall display

終了後に

- ストーリーを演じる
- 劇画化する
- 展示物を作成する

スライド 9

Reflection

- Did the story engage the children's curiosity/ interest/ attention?
- Did the children participate actively?
- Did the children respond with creative ideas?
- Did the children work well together?
- Did the children enjoy the story?
- Why? Why not?

考察

- ストーリーは子どもたちに合っているか
- 積極的参加があったか
- 独創的な反応があったか
- その理由は？

スライド 10

Resources

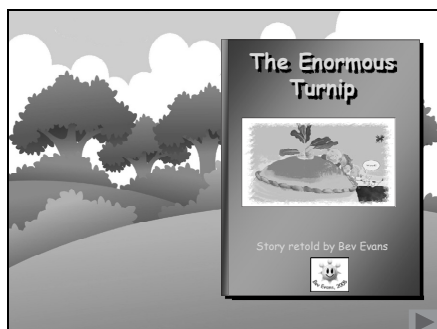
- Ghosh, I.K. (1997). ESL with children's literature. *English Teaching Forum*, 35(3), 14-19. <http://exchanges.state.gov/forum/vols/vol35/no3/p14.htm>
- Hines, M. (2005). Story theater. *English Teaching Forum*, 43(1), 24-29.
- Malkin, N. (1995). Storytelling in early language teaching. *English Teaching Forum*, 33(1), 38-39. <http://exchanges.state.gov/forum/vols/vol33/no1/P38.htm>
- Mixon, M., & Temu, P. (2006). First road to learning: Language through stories. *English Teaching Forum*, 44(2), 14-19.
- Pedersen, E.M. (1995). Storytelling and the art of teaching. *English Teaching Forum*, 33(1), 2-5. <http://exchanges.state.gov/forum/vols/vol33/no1/P2.htm>

Joan Kang Shin University of Maryland, Baltimore County
jshin2@umbc.edu 43

参考文献、資料等の紹介

参考：The Enormous Turnip（Storytelling や Activity に使用可能な教材）

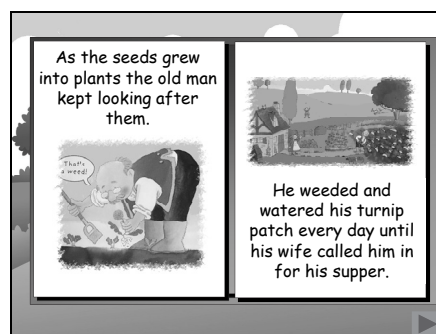
スライド 1



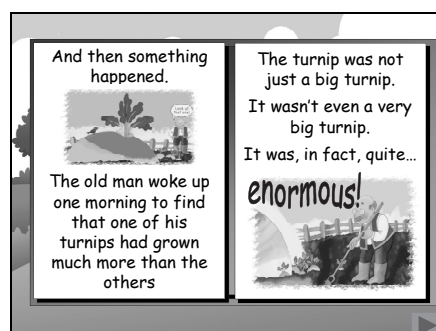
スライド 2



スライド 3



スライド 4



2-2-3. 第 2 講座

第 2 講座において、講師より TEYL に役立つ以下のウェブサイトの紹介があった。

<http://www.teachchildrenesl.com>

児童英語教育に有用な無料の教材が豊富に用意されており、ダウンロードできる。

<https://www.education.gov.uk/publications/eOrderingDownload/DCSF-00467-2008.pdf>

英国政府推奨の教授法 “Talk for Writing” の説明 PDF

<http://www.pearsonelt.com/pearsonelt/professionaldevelopment/index.page>

ピアソン社の英語教育サイトの中の英語教師トレーニングに関するページ

<http://www.onestopenglish.com>

英語教師のためのサイト、児童英語教育に役立つ情報・教材が豊か

<http://www.teachingenglish.org.uk/>

ブリティッシュカウンシルと BBC が提供する英語教育サイト、コンピューターを使ったが
アクティビティも豊富

<http://www.teachingenglish.org.uk/blogs/rama-meganathan/telling-a-story-0>

上記サイトからストーリーテリングの例を挙げたもの

<http://www.eslbase.com>

ESL（第 2 言語としての英語）のサイト、日本の小学校英語よりレベルは上

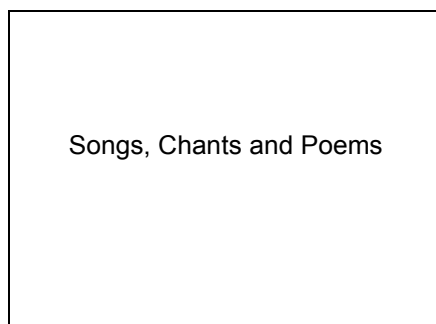
<http://www.learnenglishkids.britishcouncil>

ブリティッシュカウンシルの英語学習サイト

以上

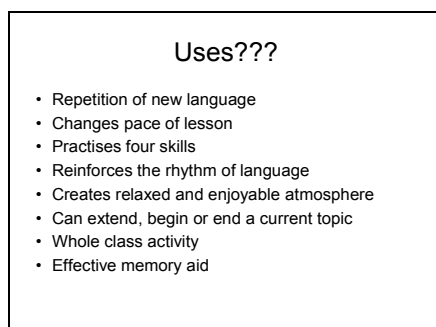
Games and Activities におけるスライド

スライド 1



歌、チャンツ、詩について

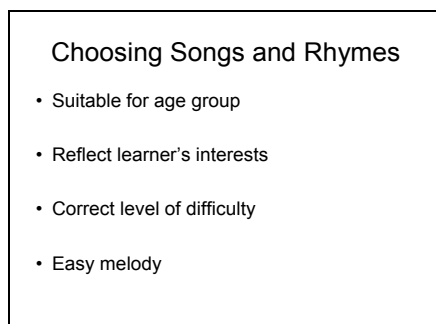
スライド 2



どのように使えるか？

- 言語のリズムを習得
- クラスの雰囲気作り
- クラス全体での取り組み

スライド 3



歌の選択のポイント

- 年齢、興味、レベルを考慮する
- やさしいメロディーを選ぶ

スライド 4

Activities

- Singing
- Miming
- Role-play
- Gap-filling
- Writing songs
- Topic work
- Missing words
- Pronunciation practice
- Art and Craft
- Story-telling
- Group singing

各種アクティビティ

スライド 5

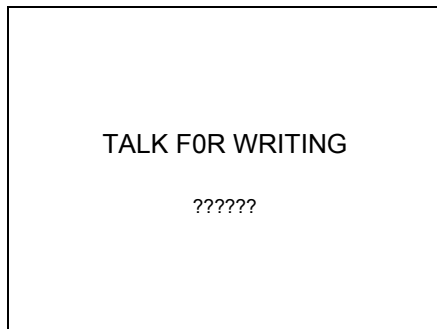
Children love singing!

Above all, have fun with songs and rhymes in your classroom – they make such a difference to your day!

2-2-4. 第3講座

ここでは英国で新たに導入された教授法のひとつ “Talk for Writing” を特に紹介してもらうこととした。ただし、難易度が高いため小学校英語での応用は現実的には難しく、ゆえに講座内ではごく簡単な説明にとどめた。以下にスライドを示す。

スライド 1



スライド 2

- TFW is a way of supporting the improvement of children's writing
- It develops their ability to 'read as writers' and 'write as readers'
- It is a developmental exploration through 'Talk', of the thinking and creative processes involved in being a writer

スライド 3

The teaching sequence for writing

- Familiarisation with text/genre
- Collecting ideas and oral rehearsal
- Teacher demonstration
- Teacher writing
- Guided writing
- Independent writing

スライド 4

Key Strategies

- Book-talk
- Writer –talk
- Story-telling and story-making
- Word and language games
- Role-play and drama

スライド 5

Book-talk

- Eliciting response
 - ‘Tell me what you thought about..’
 - ‘Have you seen anything like this before?’
- Extending response
 - ‘Tell me more about...’
 - ‘Why did you think that?’
- Encouraging critique
 - ‘Do you agree?’
 - ‘Did anyone have a different to that story?’

スライド 6

Writer-talk

- Reading as a writer
 - Understanding what response the writer wishes from the reader and how he/she does this
- Writing as a reader
 - Understanding what response you, as a writer, want from the reader and how he/she does this through planning, creating and improving one's own writing

スライド 7

Story-telling and story-making

- Learning and repeating oral stories
- Building the confidence to develop them through telling
- Extending this development into writing
- Creating 'new' stories orally as a preparation and rehearsal/practice for writing

スライド 8

3 steps to story-telling

- **Imitation:** straight retelling of learned stories
- **Innovation:** developing, extending and changing elements of a story
- **Invention:** creating a 'new' story

スライド 9

Benefits of Storytelling and making

- Builds useful store of vocabulary for later use
- Builds confidence to create original stories
- Working towards greater independence through group, paired and finally individually

スライド 10

Word language and games

- Stimulate and develop vocabulary
'Word associations'
- Warm up the imagination to more creative thinking
'Crossing the river' 'Box of Stars'
- Orally develop a character
'Tell me about...'
- Orally develop a setting
'Painting a picture'

スライド 11

Role-play and drama

- Can promote high quality thinking, discussion and written work
 - 'hot seating'

スライド 12

- www.education.gov.uk
- 'Talk for Writing' by Pie Corbett

Talk for Writing の紹介においては理論的な部分を極力省略し、オンライン上の実例を見せることとなった。You Tube 上の “Pie Corbett telling the Little Red Hen Story”を見て、英国の小学校教室内で実際に導入されている様子を学んだ。

第3講座においては Talk for Writing 以外にも別のアクティビティを取り上げ、Games and Activities 同様、受講者が実践を行う時間も確保した。巻末に参考資料を示す。

第3章 研究結果

3-1. 講師からの寄稿 A Report on TEYL Seminar Jan/Feb 2013



Christine Stone
Language Training Consultant
University of York

The International Department at Yamanashi Prefectural University has been offering the opportunity for their students to attend the University of York since 2002 for four-week intensive communication courses in English. As a result of our long standing relationship with Professor Takano, I was recently invited to come to YPU to lead a series of seminars and workshops on the topic of TEYL – Teaching English to Young Learners. This course was organised as a response to the recent government demand in Japan for elementary teachers to teach English, by organising some sessions to assist practising teachers in their approach to classroom activities and the rationale of TEYL. Furthermore, the English department will be offering a one

day seminar/workshop in July for elementary teachers, and this visit was also an opportunity to work directly with the YPU professors who will be involved in this new area of educational training.

Our first session was an introduction to TEYL for the department professors, to give them a general overview and to enable them to gain an understanding of what to expect in the forthcoming workshops. Several aspects of the styles of teaching the ‘four skills’ were addressed and discussed, with particular emphasis on the differences in approaches between the typically western approach of pro-active listening and speaking, compared with the more traditional Japanese focus on the more

passive reading and writing skills.

The course then continued over two days, each day with three sessions which were repeated for the different attendees. The first session introduced the principles of TEYL, followed by a storytelling workshop where the teachers were required to participate in related activities with the aid of the YPU English professors, who were present throughout.

In the second session, we looked at 'Games and Activities', and how this method of teaching and learning could be used efficiently and effectively in the classroom. Individual, pair work, group and whole class activities were viewed, discussed and practised – much to the enjoyment of the attendees and the professors! We finished with an open discussion where the teachers shared their own, very useful ideas with each other.

The final session began with an introduction to the recent UK Government initiative, called 'Talk for Writing', commissioned due to the underperformance of boys in Primary Schools in their writing skills. It's still a relatively new approach in the UK, but has already been seeing a rise in the levels of writing achieved by boys between six and eleven. It's the developmental exploration through 'talk',

of the thinking and creative processes involved in being a writer that we call 'Talk for Writing'. It is now being used for the teaching of English as a Foreign Language, as it can help children lay down memories in a different way to speaking, and this approach not only allows the children to speak for longer in one go, but also to prepare the way for real written work later in their learning lives.

In the last part of the final session, we looked at the use of 'Songs, Poems and Chants' in the classroom – the fact that they can practise all four skills, repeat new language, reinforce the rhythm of the language and work as a very effective memory aid. It's often a whole class activity, it changes the dynamic in the classroom and they are fun!

All the above sessions were attended, observed and assisted by the English Department Professors, who not only monitored and supported the attendees, but participated with enthusiasm in all the activities, for which I greatly thank them.

To end the course, a final session was held with the YPU English Department Professors, to enable them to give feedback and to have a brainstorming session about the upcoming one day seminar in July and possible future

programmes. It was felt that the course was very well received; the attendees were very positive in their feedback and appreciated all the input and support, saying that they would be able to use some of the activities at the very next opportunity.

I'd like to thank Professor Takano and all the YPU staff who made me feel so welcome, and I look forward to a continuing relationship with Yamanashi Prefectural University.

3-2. 受講者からの声



本講座では各日の終了時に自由記述のアンケートを配布し、意見を寄せてもらった。以下にその内容と対応を示す。

3-2-1. プログラムに参加したきっかけ／理由

- 英語教育が導入され、高学年担任が悩んでいる様子を見たり、実際に担任になったときどのように授業を組み立てていったらよいか不安だったため
- 小 6 の担任で外国語活動を担当しているが自身の指導力不足を痛感しているので参加した
- 外国語活動の時間に ALT 任せにしてしまっているといけないと思い、自身のスキルアップのために受講したいと思った。子どもたちに還元したい
- 授業で使えるような活動や英語表現を知りたかった
- 普段の授業がマンネリ化してきたので
- 最新の児童英語教育の情報を得たいと思い参加した

- 毎日の授業の中で子供たちのやる気を引き出すため、いろいろな教授法を知りたかった

記述内容についての意見・考察

受講者が本プログラムに参加した背景を知ることとなった。小学校の教育現場に英語教育への不安は残っており、それを解消するまでには至っていない。

ALT 任せではなく、担任主導の授業を求められているため、教員にとってこのような講座で語学習得の基本や教授法を新たに学ぶことは授業運営の一助となることを確信した。

3-2-2. 本プログラムで得られた有益な情報など

- 英語教育における Games and Activities の大切さ
- アクティビティに取り組む子供の気持ちがわかった気がする
- 教師が率先して取り組む姿勢を子供に見せることが大切だと思った
- 関連するウェブサイトを知ることができた
- 子どもたちが楽しく英語に接することができるような様々な方法（ゲームなど）を知ることができた
- “The Little Red Hen” は楽しく理解するのによいと思った
- Storytelling や Games and Activities の方法など、小学生の興味に合ったテーマを考えるのは難しいことなので、大変参考になったし、活用できるものが盛りだくさんであった
- 小学生という年齢を考慮した英語教育のアプローチとその工夫がよくわかった
- イギリスの最新の教育の様子が分かった

- 通常取り入れているゲームをさらに発展させるヒントを得た
- リスニングやスピーキングの指導で大切となるポイントを教えてもらった
- ワークシートや活動例を紹介してもらった

記述内容についての意見・考察

Games and Activities の評判が良かったようである。講師が強調していたように、遊びを行う際にはその目的を児童に理解させて、その上で行うことで教育的効果が高まるという共通認識も持てた。

受講者には、複数の活動例について、教室ですぐに取り入れられるという自信を持ってもらうことができた。このことから、それらの活動例が難易度や時間的にも実際の現場に合ったものであることがわかる。

教材サンプルの提供やウェブサイトの紹介も有益であった。

3-2-3. 意見・要望

- 授業をすることで不安に思うことがあるため、このような講座があると助かる
- 英語の講座が新鮮でよかった
- 講師の話を紙の資料として配布してほしい
- この種の講座をまた受けたい
- 小学校での授業の進め方やその他のゲームなどを教えていただきたい
- 小学校の教材に合った内容のものがあれば実際に現場で活用しやすい
- 授業で使いやすい歌やその導入の仕方について受講してみたい
- 今回のようなアクティビティ中心の講座を受けたい
- 学んだことを基にして模擬授業をするような時間があればよいと思った
- 教員や教員志望の人には必要な内容の講座だと思う
- 小学校英語教育に携わる人たちがもっと参加してくれるようになると英語教育がより改善されると思う
- 公立の小学校では“Hi, Friends!”を 5, 6 年生で使って英語活動を実施しているので、山梨県の英語活動の実際を踏まえ、学級担任にとって参考になるようなプログラムを組んでいただければと思う
- 低学年向きの Games and Activities も紹介してほしい
- ALT にも受講してほしいので、英語での募集要項を作り、参加を促すのはどうか
- 理論的な部分よりも実践的な内容が多い講座を希望する
- 小学校教員を対象とする講座を定期的・継続的に作っていただきたい

- 英語教育に本当に困っている教員向けのプログラムを望んでいる教員がすごくたくさんいると思うので、語学に関して専門的な教育を受けていない担任が困りながらも教えている小学校の現状を知っている方の講義を望む
- 今回参加できなかった教員のために夏休み等に同様の講座を開講してもらいたい

記述内容についての意見・考察

今回は講座を英語で行ったため、教員が受講者の理解を助けるためにサポートにしていた。しかしさらに徹底するためには資料に日本語訳をつけるなどの改善がなされるべきであろう。また、補足資料を受講者に後日送付するなどのサービスも行いたい。

自由記述から察するところでは多くの潜在的な受講希望者がいると思われる。同様の講座の定期的な開講ができるか検討が必要である。

実践中心の講座を望む声が多いようであるので講座の展開方法および内容の配分にも工夫がほしいところであろう。

ALT を受講者の対象に含めることには考えが至らなかったため、次回はそれも含めて検討すべきか。

3-2-4. トレーニングプログラム感想



石田一元（甲府市立石田小学校）

○理論編から実践的な内容へと順次ステップを踏んでの段階的な進め方であった。

○パワーポイントを使い，視覚・聴覚双方から刺激が入る講義はよかった。

○講師の先生も聞き手側のことを考慮してゆっくりと話をするとともに，身振りや手振り等の体表現を交えて講義を進めてくれ，配慮を感じた。

○実践編ではワークショップ形式で，実際に書く・話す・聞くを取り入れた経験を行うことができて有意義であった。

○ワークショップで扱った教材を基に，自校の児童の実態に合った教材へとつなげる工夫を考えることができたことは収穫であった。

●今回の参加者の英語レベルは，比較的英語に興味があったり，英語に堪能な先生方が参加していたように見受けられた。しかし，英語が苦手であっても子どもに指導しなければならない必要性から参加してくる先生方もいるので，資料への日本語訳や必要に応じてポイントごとに適宜，講師の先生の話の内容の通訳が必要ではないかと考えた。

●ワークショップで扱った教材は，イギリスでは小学校段階のものであっても，日本においては中学校1年レベルであるように思えた。

●「理論→ワークショップ」という段階的な進め方もよいが，小学校の英語活動は「積極的にコミュニケーションを図る態度の育成」が一番の指導重点なので，「ワークショップ→理論」という進め方があってもよいと思う。

●上述したが、小学校の英語活動の重点は、積極的にコミュニケーションを図ることなので、より「会話(含対話)」を中心にしたワークショップを行うとよいのではないかと考える。

●参加者の中には英語が堪能な先生がいて、講師の先生とディスカッションをしていた。周囲の者は何が話されているか分からず、その間取り残されている感が強かった。研修をより有意義なものにするためにも、研修の中で講師の先生とディスカッションは重要となる。その際には、ディスカッションの内容を参加者に伝えたり、英語が堪能ではない参加者であっても自己の考えを講師に伝える通訳が必要ではないかと考える。

3-2-5. 受講者からの声への対応として

今後このような講座を提供する場合には、現場教員が実践発表を行う時間を取り入れるなど、受講者中心のプログラム作成を検討する意義もあるのではないかと考えます。そして教育資源を提供する側の大学教員も、学習指導要領の趣旨に沿った具体的な活動を学ぶ機会としたい。また、参加者同士の意見交換も十分に行えるような工夫が望まれよう。さらには大学生にも積極的な参加を促し、相互に刺激を受けられるようなプログラムを構築したい。

第4章 考察・意見

共同研究者及び講座運営協力者からの寄稿

本プロジェクトを立案する際には共同研究者の高見沢肇氏（甲府市立新紺屋小学校・校長）、石田一元氏（甲府市立石田小学校・教頭）より現場の状況を説明していただき、また、講座を運営するにあたっては、共同研究者以外の山梨県立大学国際政策学部特任教授佐藤正幸先生をはじめとする複数の英語科担当教員からも協力を得た。ここでは、共同研究者及び運営協力者から今回の講座に関してあるいは小学校英語教育に関して寄せられた論文を掲載する。

Children learn through visual, auditory and kinesthetic stimulus. Studies have shown that of the three stimuli, kinesthetic stimulus is the greatest contributor to children's learning. This is why play, and motivation through movement, is so important for children's education. So, how do we combine auditory, visual and kinesthetic stimuli to provide a meaningful and purposeful English learning experience for elementary school children? This was the subject of Christine Stone's (CS) seminars for elementary school teachers seeking to enhance their English teaching skills.

Listening, Speaking, Reading and Writing are the four language skills. For introducing a foreign language to elementary school students, there was general agreement among the Yamanashi Prefectural University (YPU) staff that listening and speaking are of primary importance. To this I would further suggest that since learning to write romaji (romanized Japanese script) with the Roman alphabet is part of the elementary school curriculum, it offers a meaningful and purposeful opportunity for synergistically introducing English

reading and writing in an elementary and low-key manner.

The 45 minutes per week allocated to teaching English to fifth and sixth grade elementary school students in the Japanese elementary school curriculum is extremely limiting. At best, this appears to offer three 15-minute sessions a week. In language learning, exposure to the language being learnt is one of the key factors behind learners' achievement. So, elementary school teachers need to think of ways to maximize English exposure in these precious few minutes.

For English listening, CS spoke about the latest educational developments regarding storytelling. She emphasized the importance of a quiet room with no distractions, speaking at a speed that students can follow, and speaking in an animated fashion. She also emphasized gaining students' attention and motivating them through encouraging anticipation by giving children a chance to participate in the story - e.g. "and what did the cat do?" - and the importance of giving praise.

CS also provided a list of internet

material sources for teaching English to younger learners (EYL). She was concerned that the material would be unsuitable for fifth and sixth graders in Japan, as teaching EYL in other countries begins at younger ages (6 to 8). However, rather than the content and type of available teaching materials, probably a bigger hurdle to overcome in Japan, is that traditionally, English language teaching has begun in junior-high schools, leaving elementary school teachers unprepared and lacking in confidence to teach English. Should YPU decide to continue providing a training forum for elementary school teachers, this is one issue deserving of attention.

For speaking CS spoke about the advantages of learning through rhythm and rhyme. Rhythm and rhyme can be leveraged to maximum effect by employing all three of the visual, auditory and kinesthetic teaching approaches. CS also engaged us in games and pair-work to demonstrate their effectiveness as teaching aids, and moreover to enable us to directly experience their motivational effects. Once again, CS emphasised the importance of giving praise, regardless of accuracy, to encourage and motivate students.

In discussions with the participants, the

issue of correctness was raised by a Japanese elementary school teacher. We, the native English speakers, did not consider accuracy or correctness an issue of importance when introducing English as a foreign language to elementary school students, especially when the primary objective is to endow students with listening and speaking skills. Constant correction can be an extremely demotivating experience, and I am sure most people can recall a personal experience of a teacher being over-zealous with corrections, leading to their disenchantment with a subject, or dropping out of a course. Also, consider the example of: "Tomorrow, I go airport, my brother meet." We are in no doubt that, tomorrow, the speaker is going to the airport to meet her/his brother. While the English is most certainly incorrect, the speaker has communicated the message perfectly. Furthermore, as university educators, we are all familiar with Japanese college students who inhibit themselves by focusing on the grammatical accuracy of a statement, rather than on whether they have communicated the content of the message. Moreover, do people generally speak with grammatical precision in either English or Japanese? I think not. In conclusion, my opinion is that motivate to learn should take precedence over accuracy. However, I would add one caveat, that elementary school students should be

actively encouraged to properly formulate Who, What, Why, When, Where and How questions, because in my experience, inability to do so is a weaknesses of older students.

In other discussions, CS was concerned that the content of the online material she was recommending would be too 'young' for Japanese fifth and sixth graders as it was generally aimed at younger learners. I would volunteer that the concerns are probably overdone, as Japanese elementary school children are more 'naive' and less self-conscious than their European counterparts. In any case, teachers will choose to work with the materials which they are most comfortable with, and the choice of those materials usually follows a pattern of trial and adaptation. Thus, a large volume of resources to choose from and adapt is of great benefit.

Meeting elementary school teachers and sharing experiences in teaching English was, from a personal perspective, a refreshing and invigorating experience. Especially, when trying to create purposeful learning environments for adult students, it is easy to ignore or overlook techniques which work for young learners, which after content adaptation might also be effective for adult students. I would like to think that the elementary school teachers who

attended the seminars found the seminar content and the opportunity to exchange ideas outside of work a positive experience, not only in terms of ideas, but also in terms of motivation.

Tips and Theories for Teaching English for Japanese Teachers

Orla Rylands
Lecturer, YPU

In late January, Kenritsu University invited Yamanashi elementary school teachers to attend a series of seminars and workshops on teaching English to their classes. Professor Takano of Kenritsu University invited Ms Christine Stone from York University to give these lectures. Teachers attending the lecture do teach English or will teach English in the near future, and this short course provided them with ideas and tools for use in their classes. The teachers, for whom the lectures were intended, came with various levels of confidence in their own English and their abilities to teach a foreign language. Over the course of 3 days, Ms Stone taught and suggested devices to create lively classrooms and instill confidence in the teachers.

Many of the attendees had a good level of spoken English and were looking forward to the opportunity to use a language they had enjoyed while studying at University. However, some others who, perhaps, represent the majority of elementary school teachers in Japan had no confidence in their English abilities (Eigo nigate...) and viewed the plan as a major

ordeal designed to eat away at their already limited time as a teacher. It was this group of people that Ms Stone encouraged and listened to as they voiced their worries about teaching a language they barely remembered and, in some cases, had never really liked.

I also attended the sessions with 2 other teachers from Kenritstu University. Interesting, informative and lively, these lectures helped me to refresh and rethink my method of teaching. After a 20 year career in the Japanese schools system, mostly as a parent but with some experience teaching in kindergarten and junior high school, I welcome the idea of introducing English to elementary schools. However, there is one point on which I disagree with the way the Board of Education is planning to introduce English to elementary students. In Japan elementary school teachers are extremely dedicated and very overworked. They teach multiple subjects to large classes from 8.40 until 3.00 every day. The wonderful days of western summer school holidays, when the school gate is locked from June until September, are

mere dreams for them. Japanese teachers are tied to the school with rabbit feeding duty, pool days or even watering the rice plants, planted as a school project. They work hard giving back the best of what they studied to their students. This was never supposed to be classes on English. This is a transition period and in the future teachers will be trained to teach English. However, the teachers in this transition time need help and the Board of Education is not helping by telling the teachers that they can only teach 'Speaking'.

According to Tudor Parsons of York University when discussing Talk for Writing "Children lay down memories in a different way to speaking and this approach not only allows children to speak for longer in one go, but also to prepare the way for real written work later in their learning lives". Ms Stone told us that in Britain, it was discovered that boys were less likely to enjoy and excel at writing than girls and she discussed the concerted effort that British teachers have made to bring boys back into the writing fold. She used these results and ideas as a basis for her workshops. Telling us how we use different senses evenly while learning including auditory, visual and kinaesthetic senses, young learners tend toward kinaesthetic learning and prefer stand-up activities and movement in the

classroom. One aspect of kinaesthetic learning is writing and young learners also like to write things down and in this way internalise the new words. They also like to be clear about what they will be learning. Although it is deemed preferable to teach the four skills of language learning Listening, Speaking, Reading and Writing separately in an active classroom these skills overlap and a holistic approach benefits students. Fifth and sixth graders are already adept in their own language and motivated to improve their writing skills and calligraphy, using active imaginations to tell stories. It must seem strange to them that they must adopt a more childish attitude to learn English. Meaningless songs and archaic language are not helpful to either the teacher or the students. Songs and games are a very important part of language learning but not at the expense of reading and writing. As Ms Stone told us many times, classes should always be meaningful and purposeful.

There are many ways in which a proficient teacher with untried and limited English skills can teach English as well as a native English speaker. With minimal initial preparation of wall charts, calendars, pictures of food and maps, seasonal festivals, national holidays in different countries, the teacher can create a 'Foreign World' on

their own walls. At the beginning of the term students should learn the general classroom language and it should be repeated until it becomes natural (and it will) 'Stand up', 'Sit down', 'Please take one and pass them down' (good for a plate of fried chicken at the dinner table too) and all the other daily phrases. We native teachers of English have a myriad of accents and ways of pronunciation, so accent should NEVER be a worry for teachers at this early stage. The students will not recognise if the teacher speaks British English or if she has a Dublin accent or if it has a flavour of Yamanashi ben, students will have many years to perfect their accent of choice as they grow older. A young African American man told the story of how his mother had strictly supervised his nightly reading and writing homework every night. He only discovered many

years later that she could neither read nor write! When students move on to junior high school they discover that the cute games and silly songs of English class have morphed into endless struggles with verbs, grammar and writing structured sentences. Junior high school teachers would welcome a change and would benefit from students knowing the rudiments of English writing already taught in elementary school.

Every time we teach we learn something back in return. The wonderful and resourceful elementary school teachers in Japan will find the confidence to teach English and may also discover the joys of English and one day the phrase 'Eigo Nigate' will become extinct in Japan.

小学校英語教育指導者トレーニングプログラムを考える

伊藤ゆかり（国際政策学部 准教授）

コミュニケーション手段として英語を教える短期プログラムにおいてクリスティーン・ストーン講師が一貫して強調していたのは、コミュニケーション手段として英語を教えることの重要性である。

1. コミュニケーションを学ぶための教材

その重要性はまず講座で紹介された教材に表れている。短時間の講座ながら、ゲームを含むさまざまな教材が紹介され、いくつかを参加者が実際に行ったが、それらは大きく3種類に分けられるように思う。ひとつは自分のことを話し、相手のことを聞くもの、ふたつ目は身体を使うもの、そして3つ目は物語を使った教材である。なじみのある教材やゲームも含めて、今回の講座でとりあげられた教材は、いずれもコミュニケーションの力を培うものであった。ひとつめは、誕生日や星座を教えあったり、たとえば犬を飼っている人、トランペットが吹ける人を探す、といった情報を交換するゲームや教材である。個人的な情報を交換するという行為がコミュニケーションの基本であることは言うまでもない。ふたつめの身体を使うゲームは、特に体の部位を覚えたり、指示通りに動くことができるかを試すものが多い。歌を使った教材もここに含められるだろう。2日目の講座において、参加した小学校教諭から腕を動かしながらアルファベットを覚えるゲームが紹介されたのも有意義だった。体を使うゲーム

は、児童、生徒を活発に動かし、楽しませるという理由で用いられると思われるが、同時に、コミュニケーションは体全体を使って行うことだとゲームを通じて生徒に教えていると言えよう。最後は物語を用いる教材である。これには、物語を動作を交えて語るもの、劇にするもの、さらに他の人と話しながら絵から物語を作るものなど、様々な物語の活用方法が紹介された。断片的な情報を物語という形で受けとめたり、作り出すことはコミュニケーションの重要な側面であると同時に、情報の交換、体を使った表現など、さまざまなコミュニケーション方法を試すことができるということがよくわかった。

教材を紹介する際に、ストーン講師は、既成の教材を活用しつつ、教員が自分の生徒に合うように教材を作り変える必要性を強調していた。このことも、自分のクラスにおけるコミュニケーションを円滑で楽しいものにするために必要不可欠だからこそだ、と理解できる。

2. 間違いをどの程度正すか

英語をコミュニケーション手段として教えるという観点で、講師、参加者またはスタッフの間で論点となったことを少し考えたい。ひとつは、講座の中で参加者が提起した、生徒の間違いをどの程度授業中に直すかという問題である。間違いの直し方というのは、教える側、特にことばを教える

者にとっては、学習者の年齢に関わらず、難しい課題である。ストーン講師は、作文を除いては、授業中に間違いを直しすぎない方がよいという立場であった。日本の小学校英語教育においては、英語に慣れ、英語を学ぶ楽しさを教えることが主目的であり、間違いを直すことはその目的にそぐわないと考えられるが、それでもつい教員は間違いを直す衝動に駆られると思われる。ひとつの解決方法としては、どのようなコミュニケーションを学ぶことが求められているかという視点で、間違いを正すか否かを判断することが考えられる。たとえば、誕生日順に並ぶゲームをしている時に、自分の誕生日を言い間違えれば、必要なコミュニケーションがとれないことになるので、そのような間違いは直すべきであろう。このような考え方をとることで、間違いを直すことについて、ある程度妥当な判断が可能になるのではないだろうか。

3. 授業における英語と日本語の使用

もう一つの論点は、授業でどれだけ日本語を用いるか、ということである。ストーン講師は、すべて英語で話す必要はないと言い、教員や生徒同士が日本語で話すことにも肯定的であった。学習者に英語を強いることの悪影響、そして日常のコミュニケーションにおける複数の言語が混ざる可能性を考えても、授業で日本語の使用を禁止する必要はまったくない。しかし、どの程度用いるかという問題は残る。ここで思い出されるのは、講座実施中に、講師の話が半分くらいしかわからない、と言っていた参加者がいたことと、本報告書における石田一元教頭による、講座に通訳がいた方が

良いのでは、という指摘である。いずれも講師による理論的な説明に関連して述べられており、教材を体験する際は、英語による進行はほとんど問題にならなかったと思われる。スタッフとしてより積極的に何らかのサポートを行うべきだったと反省をすると同時に、説明を100%理解する必要があるだろうか、という疑問を抱く。今回の講座は、教材を実際に試し、講師と参加者が双方向的なコミュニケーションをとることで学ぶことが主眼であったし、そもそも外国語によるコミュニケーションをすべて理解することは困難である。講座参加者は、英語を学ぶときの児童と同様に、ことばが完全には理解できない心もとなさを感じたことと思うが、そのような不安を感じつつ学ぶということが外国語によるコミュニケーションを学ぶ際に大切なことであるように思う。授業において、英語と日本語をどの程度の割合で使用するかについては、必要以上に神経質になるのではなく、生徒の様子を観察しつつ、理解できないとわかっている英語を大胆に使うことも時には有益だと思われる。

まとめ 小学校英語教育とのつながり

以上述べたような、コミュニケーションとして英語を教えることの重要性を示した講座に参加したことで、本学における自らの英語教育をあらためて考えさせられた。教科書や授業教材を用いるときに、コミュニケーションという視点で使用目的を明確にする必要性を実感したし、生徒が間違いを自分で見つけられるよう指導する、という指摘をはじめとして、自分の授業に活用したいと思う点が多々ある講座であった。

言い換えれば、参加者と同様に、学ぶものとして講座に関わったことになり、このような形で小学校の先生方と場を共有できた喜びを感じている。将来的には、小学校から英語を学習した学生を大学に迎えること

になり、小学校、中学校、高校という教育の積み重ねの上に大学の英語教育があることを現在以上に痛感することになると思う。それを見据えて、地域における英語教育とのつながりを深めたい。

Should English be Taught in Elementary School?

Hiroshi Yamashita
Associate Professor, YPU

It is widely believed that starting to learn something earlier is advantageous in mastering it quicker. This is said to be also true for language learning, and so more and more countries are starting foreign language education at an early stage of their elementary school programs.

Against such a world trend, Japan had, for a long time, adhered to its traditional policy of starting its foreign language education at 7th grade, but recently the education ministry finally changed its long-standing policy and started teaching English to 5th and 6th graders as well. Although I am basically in support of this change, I will here present some evidence to show that teaching English once or twice a week in a classroom environment is less helpful, citing the data from my earlier studies.

About a decade ago, I conducted some extensive researches on whether what is often called the critical period hypothesis is on the right track, using adult learners of English who had started learning it at different ages. The controversial critical

period hypothesis claims that unless we start language learning during a limited period of time in our childhood, we can never master it fully. Although it is extremely difficult and immoral to test the validity of this hypothesis using the first language, we can easily plan an experiment if we use foreign languages as items to be tested.

In order to see whether it is the age at which one had started learning English or the learning environment that plays a more important role in language learning, I divided my students into the following four groups.

Group A

Those who had started learning English after entering junior high school (at the age of thirteen).

Group B

Those who had started learning English earlier in Japan at a cram school or at a language school. They had started learning English before the age of ten and had classes only once or twice a week.

Group C

Returnees from countries where English is mainly used. All the students in this group had started English before ten at the latest.

Group D

Those who had started English after entering junior high school in Japan but had spent at least three years in a country where English is mainly used as students.

(Please be noted that English was not taught at elementary level at the time of these researches.) I sent out to them a sheet of paper printed with as many as sixty to seventy English sentences and asked them to judge whether each of them was grammatical or not. The sentences included, among many others, grammatical sentences involving wh-movement, as well as those violating Subjacency or ECP. The following are only some of the types of sentences used in the tests.

(Samples of grammatical sentences)

What did he see? /What happened?
/When did you see it? /Who do you think Mary saw? / Who do you think that Mary saw? /Who do you think saw Mary? /
Where do you think Mary bought the car? / Where do you think that Mary bought the car?

(Samples of ill-formed sentences violating Subjacency)

What do you wonder whether Tom bought at the store? /What do you believe the claim that he witnessed?

(A sample of a sentence violating ECP) (ungrammatical)

Who do you think that came?

Note here that although Japanese, the mother language of my students, also has wh-questions, it lacks wh-movement, so it is difficult for them to judge these sentences using their knowledge of the first language: i.e., Japanese. Ungrammatical sentences are especially useful in testing one's linguistic intuition, as such sentences are never encountered unless he or she takes a course in linguistics.

The results were amazing. They showed that those in Group C and D did equally well, whereas the average scores for those in the remaining two groups were equally poor. What this suggests is that it is not the age but rather the learning environment that plays a central role in language learning. All those in Group C and D had learned English in an environment where the language is used, while those in the other two groups lacked such a chance.

I still believe there are many advantages for starting things early and English is no exception. But it is clear that teaching a foreign language only once or twice a

week in a classroom environment is far from being sufficient, no matter how young the pupils may be.

小学校「外国語活動」の導入と小中連携への展開

池田充裕（人間福祉学部・教職課程）

平成 23 年度より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第 5・第 6 学年で年間 35 単位時間の「外国語活動」が必修化された。この春、平成 25 年度には、その第一期生とも言える児童が中学校に入ってくる。今後、外国語活動を経験した児童の受け入れを踏まえて、中学校では小学校と連携しながら外国語科（英語科）の指導を工夫していくことが求められるだろう。

国語、算数、理科などは小学校、中学校ともに教科として位置づけられており、学習指導要領でもその接続が意識されている。しかし外国語活動は教科ではなく、教育目標や指導方法などは中学校の英語科と異なる部分が多い。また、中学校では英語科教諭免許を持つ専任教諭が指導にあたるが、小学校では他教科とともに学級担任が担当し、子ども観や授業観においても両者には違いがある。このような点からも、中学校教諭と小学校教諭の間での意思疎通や相互理解が重要となってくる。

既に全国各地では、外国語の指導に関わる小中連携の取り組みが展開されている。小学校・中学校それぞれの担当教諭の相互

の授業参観、外国語活動での中学校教諭の出前授業、両者による小学校や中学校でのティームティーチングの実践、小 6 生・中 1 生合同での外国語関連イベントや授業の実施、教材や指導案の共同開発、合同研修会での教育目標や教育内容等に関する情報交換や相互理解など、数多くの試みが始まっている。

外国語活動を実施する小学校においては、ともするとこれまでは、「どのように子どもを受け入れるのか」というインプットの部分に注目が集まってきたと思われるが、完全実施から 2 年経ち、今後は中学校に「どのような子どもを送り出すのか（引きわたすのか）」というアウトプットの面をより強く意識していく必要がある。総合教育センター等が企画する外部研修や大学での教員免許更新講習などの場においても、小中学校間や教員間のネットワークを形成・活性化するような試みが期待される。

The Importance of Intrinsic Motivation in Japanese Elementary School English Programs

Kevin C. Browne
Associate Professor, YPU

The importance of fostering motivation in second language learning is a vital aspect needed in any foreign language program or curricula (Brown, 1990; Dörnyei, 1994), but how to do it well, where its focus should be directed and what type of motivation is most necessary are not always immediately evident. Recently Japanese elementary schools, through directives from the Japanese Ministry of Education, are including English language education to their curricula. As a result, teachers are faced with the challenge of including English language instruction though many have experienced no formal training in foreign language instruction, and lack the necessary confidence needed to be successful in this task. The aim of this report is to discuss how intrinsic motivation of students, teachers and administrators is vital to the success of Japanese Elementary School English programs.

There are two kinds of intrinsic motivation that is needed in the classroom. The first is Second Language Learning Intrinsic Motivation that is

defined as, “enjoyment of learning a second or foreign language for its own sake without any external coercion or pressure” (Wu, 2003: 502), which focuses on student motivation, and second is Second or Foreign Language Teaching Intrinsic Motivation, which derives from teachers’ experiences of satisfaction and pride through student success and achievement regardless of extrinsic elements (Latham, 1998.) Student motivation is more often the subject of discussion and planning by administrators and by teachers when preparing lessons or curricula, and is worth some discussion here, but increasing motivation in teachers needs at least equal attention by administrators and teachers themselves when developing and implementing English programs.

Since many Japanese Elementary School teachers lack formal training in English language education, low confidence is a major concern and hindrance to intrinsic motivation. Prior to this directive, formal English language education did not begin

until Junior High School where English teachers have teaching degrees specializing in English Language education. English has been thrust upon elementary school teachers with no extrinsic motivators like bonuses or additional pay for including its instruction. This means that success in the classroom relies almost completely on teachers seeking the intrinsic benefits of the experience with their students, and to do so effectively they require additional training. In order to empower teachers with the confidence and necessary motivation to function as effective English teachers, adequate and regular training by professional English language teachers and academics is a must, as well as providing the necessary materials and resources to administer a program. It is not enough to admit, include or demand that English language education in Japan should begin at the Elementary School level, but guarantee that any such program be organized and administered effectively to address the needs of all parties involved. Since specialized training is lacking among teachers, administrators must give more consideration to the teachers first if any hope of success is to be experienced.

Intrinsic motivation for students originates with the attitude and motivation the teacher brings to the classroom. If a teacher feels the task is a

burden, unnecessary or otherwise not constructive the student will probably acquire the attitude and level of motivation toward English language learning that the teacher brings to the class. Without a motivated teacher there will probably not be motivated students; therefore, one unmotivated teacher can create potentially hundreds of unmotivated students, and vice versa.

As teachers' motivation can affect student motivation, so too must administrators use careful consideration of their role in English language education at their schools (Raffini, 1996.) Teachers require very clear objectives and goals that are reasonable and possible within the appointed amount of time allocated toward English language instruction from administrators. If, for example, students are given less than one hour of English language instruction per week the goals and expected outcomes from the students must be clear, practical and accomplishable for the teachers. If the expected goals are neither reasonable to accomplish nor clear to the teachers, they are likely to experience feelings of failure and reduced motivation. Teachers' intrinsic motivation is dependent on seeing positive results of their efforts reflected in their students' abilities. For this reason, it is also vital that elementary school administrators overseeing or directing English language

programs also receive guidance and training in second or foreign language education from professional educators and academics.

A lack of intrinsic motivation by students, teachers or administrators can seriously reduce the chances of success in any foreign language-learning situation. If administrators are not practical in their requests setting reasonable goals of the teachers, and do not provide teachers with the necessary training and skills they require to teach English with confidence and enthusiasm, the end result will be unmotivated students. At the elementary school level the only practical type of motivation anyone can expect from students is intrinsic motivation - the joy of learning another language for its own sake. Professional training for teachers and administrators is necessary to foster and spread intrinsic motivation for English language education in Japanese elementary schools.

References:

- Brown, H.D., 1990. M & Ms for language classrooms? Another look at motivation. In: Alatis, J.E. (Ed.), Georgetown University Round Table on Language and Linguistics. Georgetown University. Washington, DC.
- Dörnyei, Z., 1994. Motivation and motivating in the foreign language classroom. *Modern Language Journal* 78, 273–284.
- Latham, A., 1998. Teacher Satisfaction. *Educational Leadership*, Vol. 55, 82-83.
- Raffini, J., 1996. 150 Ways to Increase Intrinsic Motivation in the Classroom. Massachusetts: Allyn & Bacon.
- Wu, X. 2003. Intrinsic motivation and young language learners: the impact of the classroom environment. *System* 31, 501-517.

まとめ

仮説検証

講座を終了し、事前に立てた仮説を以下のように検証した。

①小学校「外国語活動」を充実させるための教員トレーニング講座の提供が地域の中で望まれている。

講座申込者数から判断して、個人的に教員トレーニングを受講しようとする教諭は少ないのではないかと考えた。各学校では中核教員の育成や研修時間の確保に取り組んでいることは確かであるが、多くの小学校教諭にとっては従来の業務に加え外国語活動の充実に力を注ぐことは難しいのかもしれない。今回の参加者は自主的に申し込んできたケースがほとんどであるため、特に目的意識が高い。今後も引き続き同様の講座を望んでいる。その一方で大多数の教員が現在そして今後どのように外国語活動に取り組もうとしているのか、教員トレーニング講座を必要としているのかどうか、正確に把握することはできなかった。

②県立大学の個性を生かして、地域で既に行われている研修とは異なる講座内容を構築することができる。

英国ヨーク大学教育学部 TEYL 領域の専門的見解をふまえたアプローチを導入、事前にその内容を精査・検討することによって、本学ならではのプログラムを構築することができた。これは山梨県立大学と英国ヨーク大学の長年にわたる交流の実績とそれによって育まれた信頼から築かれたものであり、新たな国際的学術交流をスタートさせることができた。これまでは学生が一方的にヨーク大学を訪れ言語文化研修を受けるだけであったが、今回はヨーク大学と共同で教員トレーニングプログラムを構築し、さらに講師を派遣してもらうことができた。大学にとっても大きな収穫となったと考えている。

③多くの小学校教諭は、回数が十分だとは言えないが定期的に実践的研修を受ける機会を持つため、理論部分の導入も効果的である。

理論部分にもしっかりと向き合う講座内容をと考えたが、講師の説明が英語で行われた際に通訳が行き届かず、受講者に不親切な部分があったかもしれない。しかし実践と合わせて理論を学んでもらうことで指導の目的を明らかにすることができ、その部分で効果が生まれたと考える。

④内容のバランスとしては理論と実践的指導法のいずれにも偏らない講座が最適である。

講座では理論と実践のバランスを考えて計画した。時間的余裕が確保できたなら

ば将来的にはワークショップ形式のセッションをもう少し多く取り入れた講座を計画したい。

⑤小学校の現場の実情をふまえた講座内容の計画が必要である。

日本の小学校における外国語活動の実態を理解してもらえるように、関連する資料をヨーク大学に送付し、授業内容やレベルを把握してもらった。しかし小学校英語は低学年から高学年まで幅広く教授されており、いずれにも完璧にマッチするレベルを設定するのは理想的ではあるがかなり不可能に近い要求である。今回は英国の子どもや外国籍児童などに実際に使われている教授法を紹介してもらうなど、結果的には日本の小学校現場に限定せず有効と考えられる英語教授法を含めて学ぶ内容とした。

⑥受講した現場の教員には、TEYL の在り方と、その実践方法を学ぶ有意義な機会となる。

TEYL の基本、そして実践部分など、受講者には利益が大きな講座となった。本プロジェクトでは当初の計画の約半分の予算に合わせた講座内容の見直しが余儀なくされ、その結果、講座全体の時間を短縮して行うことになった。それに伴い、本来取り入れたいと考えていたかなり多くの部分をカットせざるを得なくなった。それらを次回には講座に含めることを希望している。当初の案は次のようなものであった。

	第 1 講座 (90 分)	第 2 講座 (90 分)	第 3 講座 (90 分)	第 4 講座 (90 分)
1 日目	イントロダクションと TESOL 方法論① (児童の英語習得の原則)	ワークショップ (指導者のためのスピーキングスキル)	ワークショップ (クラスルームイングリッシュ)	ワークショップ (発音の改善) フィードバック
2 日目	1 日目のレビューと TESOL 方法論② (言語と文化の教え方)	ワークショップ (語彙と文法の習得について)	ワークショップ (ティームティーチングのポイント)	ワークショップ (ゲームの有効な使い方) まとめ、アンケートなど

たとえば 1 日目第 2 から第 4 講座については多くの小学校教員が不安に思っている部分をカバーする内容である。このような講座は指導者としての英語力向上につながり、教師が自信を持って英語教育に取り組むことを助ける講座となる。それゆえ再度プログラムを計画する際には是非取り入れたいと考える。

⑦参加対象を現任教諭に限定せず、教諭志望者に枠を広げることによって、志望者にとつ

ては小学校外国語活動についてだけではなく小学校教諭という仕事・教育現場の様子を学ぶ貴重な機会を提供することができる。

現任教諭以外に英語教室教師、本学の英語科教職課程履修学生、英語教師志望者も参加し、小学校教諭と交流する機会が提供できたことは貴重であった。

⑧大学の地域への貢献とともに、大学と地域の学校教育現場の協同プロジェクトとして成果を上げることができる。

本研究の共同研究者として、地域の小学校校長、教頭先生に研究に加わっていただき、講座の計画・実施に意見を反映させることとなった。今回の研究によって、大学として地域の学校との連携ができた。

プログラムの反省と今後の可能性

現職教員からの参加希望があまりに少なく、ある意味の驚きを禁じ得なかった。小学校現場をよく知る共同研究者の助言を受け、山梨県及び甲府市教育委員会の後援を申請し、甲府市小中学校校長会へ赴いて講座の案内を行い、県内の教育事務所宛に案内文書を発送し、各小学校への配布を依頼した。さらに大学ホームページに案内を掲載し、短い期間ではあったができる限りの PR を実施した。講座会場となる山梨県立大学は甲府市の中心にあって地理的にも問題はなく、参加費は無料、日にちも選択可能である、という条件を設定することができた。ところが申込者数があまりに少なく日程の変更をさらに検討しなければならない状況となった。申込に時間的な制約があったのは確かであるが、広報が不足したという判断はできない。というのは、英語教育の関連業者からの問い合わせはその一方で複数寄せられたからである。

たとえば山梨県と似た規模の県である島根県において、島根大学をベースにした研修会「小学校外国語活動の会」がある。年間数回の集まりを開催し、平均 50～60 名の参加者があるという。さらに平成 23 年度は一步踏み込んだ形で会を発展させ、地域を素材にした外国語活動のための副教材を作成している。大学が地域と協働し、地域に貢献する理想的な形の一つであるかもしれない。

(http://www.edu.shimane-u.ac.jp/kyoiku_event/project_houkoku/project_houkoku2011/proj-12.html など参照)

教員側としては様々な利益を得ることができた。特に TEYL に関しては先駆的研究機関である英国ヨーク大学のスタッフから貴重な情報をいただいた。Talk for Writing についてもそうであるし、メリーランド大学 Joan Kang Shin による TEYL 研究についての説明お

よび資料提供も有り難いものであった。今回学んだ専門知識を十分に吸収して今後プログラムを発展させていきたい。

なお、準備段階で困難を極めたことがらを補足的に述べる。研究の中心的部分ではないが、実は事務的な部分に困難が発生した。プログラム立案の時期（24 年 7 月）から実際の講座（25 年 1 月）までの約半年の間に、近年まれにみる為替相場の変動が起こり、大幅な円安となってしまった。したがって、外貨で支払う謝金等の負担が当初計画よりも増大することとなった。海外からゲスト講師を招聘するときの注意点の一つであろう。

今後の課題としては、このようなプログラムを継続的にやっていくかどうか、その体制や目的を再検討することがまず挙げられる。今回の受講者へのフォローアップをどのようにそしてどの程度やっていくのか、また、いかにして教員免許更新講習と有機的につながりを持たせ発展させていくのか、考えていきたい。

最後に、今回の講座を実現するのに多大な努力を注いでくださった講師のクリスティーン・ストーン氏に感謝の意を表したい。

以上

Games and Activities

(You can 'google' most of these activities for instructions)

1. When is your birthday? - (months)

- children must ask each other which month their birthday is, and stand in the correct order.

- this can be done for other topics: age, height, etc

2. Make your own 'Spinner' – (colours, months, irregular verbs etc)

- cut two circles, one with a space. Join together with butterfly clip

3. Hot Seat

4. 'Find someone who...'

5. Word Association

6. 'Snap' — use words like big/pig, wood/good, small/smell to make it more difficult. What else can it be used for?

7. Why? Where? Who? — cards with 'Wh' questions, to find other card with answer. Use current topic for consolidation.

8. Word Bingo — use also for letters, clock times etc

9. Face-to-face — pair face each other. Person in centre gives commands eg. Stand back to back, touch your toes, touch your partner's nose (102)

10. Simon says... put your hands in the air, etc

11. Circle the right number — two teams. First to circle the correct number/ time etc

12. Objects on a tray — memory game. Take one object away. Which is it?

13. I spy with my little eye / 1,2,3 I can see....something beginning with....

14. Sport, animal, name, food. — specified letter, teams. First to get all four.

15. Board games — (any grammar focus)

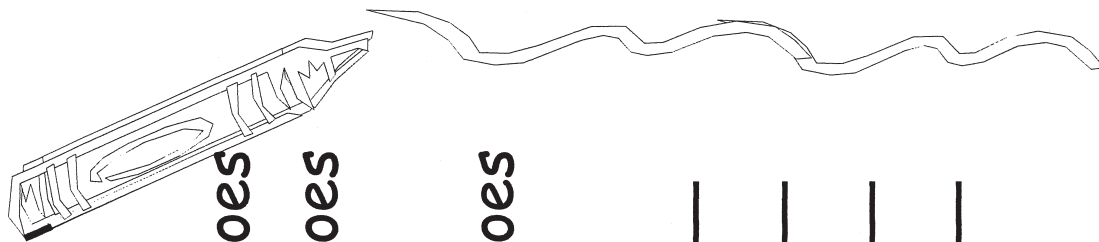
Head, shoulders, knees and toes

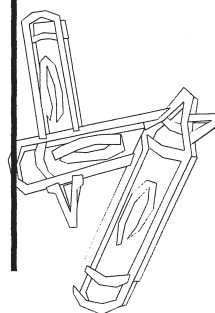
Head, shoulders, knees and toes, knees and toes

Head, shoulders, knees and toes, knees and toes

Eyes, ears, mouth and nose

Head, shoulders, knees and toes, knees and toes





Games and Activities

Useful classroom resources for very young language learners

- ⌚Crayons, paper etc. for drawing
- ⌚Age-appropriate storybooks
- ⌚Dressing-up box
- ⌚Finger or glove puppets
- ⌚Camera (disposable if necessary, digital for preference)
- ⌚Picture dictionary for children
- ⌚Real or toy objects such as doll's tea set, model cars etc., soft ball, plastic fruits, vegetables, food items etc.
- ⌚Visually-based educational games
- ⌚Tape recorder
- ⌚Songs and rhymes
- ⌚Charts, for example those associated with English reading schemes - nature, seasons etc.
- ⌚Picture cards for sequencing, matching Phonics schemes
- ⌚Big cardboard boxes for making TV set, puppet theatre etc.
- ⌚Packs of cards - pairs of pictures (and/or words) can be stuck on the cards to make Snap game
- ⌚File of pictures from magazines, catalogues etc.
- ⌚Big classroom scrapbooks for making up class story books etc.

Myself

NOTE: The theme *Myself* will be fundamental for many other areas of language development as this is the most concrete basis upon which young children can understand their learning environment. In addition to activities under the heading *Myself*, further examples include what I like to eat, what I did yesterday, news, my favourite clothes, what I wear for different weather, the animals I like etc.

1

Objective: Learning to answer 'What is your name?'

This game can be used as a 'warm up' to review any vocabulary that has been previously learnt, e.g. clothes, food, weather etc.

Method:

- ⌚Children stand around teacher so that they can catch a soft ball
- ⌚Teacher throws ball slowly to each child asking 'What is your name?'
- ⌚Child replies with name only or may say 'my name is ...'

If reviewing vocabulary, teacher holds up a picture/flashcard/object then throws the soft ball saying, 'What is this?' Child replies, 'It's a ...'

For older children, they can throw the ball to one another and ask the question; if reviewing vocabulary, put the cards in the centre of the circle and each child chooses a card to hold up before throwing the ball.

2

Objective: Learning to describe the family with the vocabulary for different members of the family

Method:

- ⌚ Each child draws a picture of his/her family group
- ⌚ Introduce idea of size and opposites 'big and small' - Mummy/Daddy is big and _____ is small.
- ⌚ Teacher labels the people in the picture with Me, sister, brother, Mummy, Daddy etc.
- ⌚ Teacher counts, with the child, the number of people in the family

3

Objective: Learning the parts of the body, some items of clothing and colours, counting one and two

Method:

- ⌚ Each child lies on 'butcher's paper' and teacher draws an outline of the child on the paper.
- ⌚ Child (with teacher's help) draws in and colours hair, eyes, nose, mouth, clothing and shoes
- ⌚ Child learns words for colours - my eyes are brown, clothing - my trousers are blue, numbers - I have two arms/shoes (It may be helpful to have a mirror in the classroom!)

4

Objective: Getting children to talk about one another, using all the vocabulary that they have learnt about the family, food, activities etc.

Method:

- ⌚ Take a picture of each child and put these pictures on a poster with the child's name written below
- ⌚ For older children, put them on a map of the world with a tape or ribbon connecting the child to the country of origin of the family.
- ⌚ Get each child to describe another in the group. This is _____ her/his family comes from _____. He/she has brown hair and blue eyes, he/she has one brother and one sister, he/she likes going to the shops etc.
- ⌚ Children can prompt one another and correct the information.

5

Objective: To introduce the concept of common celebration when a child in the group has a birthday.

This process involves:

- ⌚ Learning some days of the week,
- ⌚ Counting up to the age of the child,
- ⌚ Specifying colours to make a card,
- ⌚ Talking about food for a party,
- ⌚ Reading a story about a birthday,
- ⌚ Talking about how different children celebrate in their families

The preparation for a birthday, or any other festival such as Halloween, Christmas, Easter etc. takes several classes and becomes more like a project. This model can also be used for Seasons, holidays and festivals.

6

Sit down when you hear it!

This game is intended to get children to listen carefully for the words that they already know.

Method:

- ⌚ Draw up a list of words that are probably unknown to the children
- ⌚ Beside this put a list of words that they have learnt recently. They should relate to a particular theme, for example words to do with the family, words for colours, words for numbers etc.
- ⌚ Tell the children to listen only for the thematic words - e.g. Listen out carefully for any 'colour' word .
- ⌚ The children move around slowly or stand still
- ⌚ When they hear one of the words they do not say anything but must sit down quietly
- ⌚ If the group is small, they may tend to copy one another. In this case make them stand in a circle with their backs to one another so that they cannot see what the others are doing.

7

Moving on the spot!

In this game children follow instructions which use the vocabulary for parts of the body. They do not need to move around the classroom although, if this is possible, teacher can add more instructions.

Method:

- ⌚ Children stand in front of teacher and follow the teacher's verbal instructions and actions
- ⌚ Instructions include:
 - Shake one hand (two hands), your head
 - Close your eyes
 - Touch - your head, nose, hand, feet, leg
 - Sit down
 - Put your hands up/down
 - Open your eyes

山梨県立大学地域研究交流センター2012 年度報告書
「山梨県内の小学校英語教育における指導者の養成と研修に関する研究」

2013 年 3 月 29 日 発行

発 行 山梨県立大学地域研究交流センター
山梨県甲府市飯田 5-11-1
電 話 055-224-5261 (代表)
印 刷 三 縁

